第23回AAF戯曲賞選評

荒井洋文

戯曲の選考をするのは初めての経験だった。劇作家ではない私がどのような観点で戯曲を評価し得るのか。「地域課題や社会課題にアプローチする事業」ということで民間の劇場運営者としての観点が求められたと想像するが、その立場性で私が戯曲そのものを評価してよいものか。問いを抱えながらも、これまでの公共劇場の制作者、民間劇場のプロデューサーとしての経験も踏まえて選考にあたらせてもらった。

まず、選考にあたって、選考方針について気になることがあったので記しておきたい。提示された方針のひとつに、幅広い観客を対象とできるという趣旨のものがあった。前提として、優れた戯曲であることも求められていた。手話通訳や字幕、トリガーアラートなどによって、障害のあるなしに関わらず幅広い観客が観劇しやすい環境をつくることは、より推進されていくべきことだと思う。ただ、戯曲の可能性を広げるような作品、つまり難解だったり、斬新だったりするものも評価の対象になる選考過程においては、この二点を同時に検討することは難しいのではないかと感じた。作品の質や価値とは切り離し、上演の段階でどのようなアクセシビリティが、どこまで可能かについては、別の議論として行うこともできるのではないか。また、この方針を「幅広い観客を対象とする戯曲」としてとらえた場合には、戯曲のわかりやすさが優先される可能性があり、審査方針に矛盾が生じてこないだろうか。今後においては、事前に事務局と審査員との間で審査方針についての確認と、必要に応じてディスカッションの時間が設けられるとよいのではないかと思った。

最終選考に残った作品はどれも優劣つけがたく、審査員で意見が割れ、最後まで選考は難航した。結果的に大賞と特別賞が決まったが、受賞を逃した作品もその差はわずかだったと思う。

泉宗良さんの『いみいみ』は同語反復によって徹底的に貫かれており感服した。発話された台詞は、すべて発話した本人に返ってくる印象をもった。何もない空間から同語反復のみによって、次第に劇空間が立ち現れてくる構造は見事で、俳優との実験が繰り返された結果なのだろうか。「女」として眼差されることへの抵抗と、私が何かを眼差していることへの気付きと抵抗。同語反復は二つの背反する抵抗を炙り出し、「自分とは誰なのか」という哲学的な問いに正面から向き合っているようにも読み取れる。このことを「劇空間」として立ち上げようという実験的で意欲的な作品だ。実際にどんな世界が現れるのか、上演に期待したい。一人芝居として描かれているが、複数の登場人物によって、複数の世界が立ち上がり、交差する様も見てみたいと思った。

三橋亮太さんの『良いキャンペーン』は、一読しただけではどんな世界が描かれているのか理解できず、繰り返し読ませてもらった。設定に関しても謎が多く、かえって興味をそそられた。繰り返し読むことで、時系列が逆に進みながら進行していくような劇構造が理解できた。噛めば噛むほどに味が出てくることから、これまで劇作家としての、集団としての試行錯誤があったことが想像できる。どのようなプロセスでこの劇構造に至ったのか興味深く、今後の作品や集団のあ

り方にも注目していきたいと思った。「感覚が閉じていく」という設定は、テクノロジーの進化によって現代にも起こりつつあることで、同時代性を感じる。ラストシーンが「過去」の出来事であるという劇構造にドラマ性を持たせている点が素晴らしいと感じたが、美的に、ロマンチックに描かれている傾向には感覚的になじむことができなかった。

川村智基さんの『Fusion,（フュージョン、）』は、私が最後までこだわって最も推した作品だ。まず台詞が身体的であると感じた。意味不明な台詞、言葉になりきらない咆哮のような台詞がちりばめられてて、わけのわからなさも含めて、行き場のない身体、エネルギー、関係性が描かれていて、そこに現れる世界がどんなものか、想像を掻き立てられた。劇作家の妄想や理想世界を言語化したというよりも、現実の肉体を持った人間の集まりがまずあって、その集まりに対して感覚的に台詞を与えているような印象を持った。描かれている社会は、現実世界からは見えにくい、あるいは見えにくくされている場所にあって、そんなコミュニティが確かにあることを世界に証明するかのように描かれている点に、社会と演劇の関係性についての劇作家の哲学と強い意志を感じた。セックスや暴力があからさまに描かれており、上演に際してハードルが高い作品であり、様々な配慮が必要となることも間違いないだろうが、今ある社会の隠されがちな世界を意欲的に照射した、むしろ公共性の高い作品ではないかと思う。この作品が多くの壁を乗り越えて、上演されることを願う。

山口大器さんの『Plant』は、人間が植物に飲み込まれていくという設定がユニークだった。上演してこそ面白みを発揮する設定だろう。マイクロチップを体内に入れて様々な同意を得るという近未来に実際にあり得そうな設定も、様々な配慮が求められる今の社会を批判的に言い当てている。ドラマとしては澱みなく、わかりやすいものになっていて、戯曲としての完成度は高いと感じた。一方、登場人物が劇団とその周辺にいる人々に限られていること、わかりやすくキャラ設定されていること、人間関係がステレオタイプということが気になった。人間も関係性も、世界も、もっと複雑なものではないだろうか。

向坂達矢さんの『落ちる』は、言葉から言葉が生まれ、疾走しながら次々に展開していく様が気持ちがよく、楽しませてもらったが、心底笑えない感じも残った。後半にいくにつれて、同じテンポで会話が進むことが、他者や身体の存在を感じさせず、この題材は戯曲よりも小説のほうが適しているのではないかと感じた。空に浮かぶ巨大な金玉袋が男性性の象徴として描かれ、最後に女性が登場してその世界を打ち砕く設定や、台詞回しには既視感があった。劇作家がその職業なり役割の同時代的な価値を問いつつ、自虐的に貶めていく様子が痛くもあったが、何かの役割を背負いつつ、どこにも行けず苦しんでいる様子は就職氷河期世代の筆者も含むある種の中年男性にもあてはまる話であり共感を得るのではないか。劇作家と近しい人々からなる世界観は、資本主義社会とネットによってバラバラにされた個人の集合体でしかない今の社会そのものを現わしていると言ってもよいのかもしれない。また、このように世界を捉えることを一緒に笑ってくれる、近しい共同体のようなものを想定してこの作品は描かれているようにも感じられた。その共同体の外側をどう見て、どう関わるか、という視点がほしいと感じた。